

1、縄文時代

調査区北側のA区では、縄文時代中期（約5,000年前）の住居跡がまとまって発見され、縄文土器や石鏃などが出土しました。その南側のB区では、貯蔵穴や落とし穴が発見されています。

縄文時代の住居は、竪穴住居と呼ばれる地面を掘り下げた半地下構造のものが一般的で、住居の中央には炉が設けられていました。炉は調理のほか、暖房、照明、種火の保存など、様々な役割を担っていたと考えられています。

今回の調査では「地床炉」と「埋甕炉」という2種類の炉が確認されています。地床炉は単純に床面を掘りくぼめたもので、埋甕炉は深鉢形土器の下半分を割り取って床面に埋め込んだものです。いずれの炉にも、真っ赤に焼けた土が確認されています。

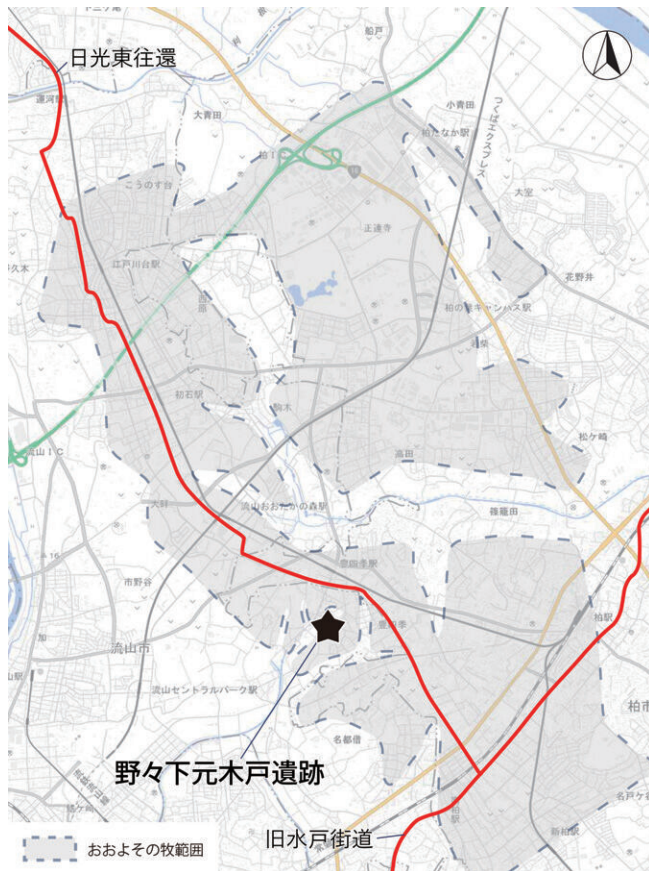
野々下元木戸遺跡では、縄文時代の住居跡と、狩猟に関連すると思われる落とし穴や石鏃が見つかったことから、定住生活をしながら、狩猟や調理を行っていた縄文人の活動の一端をうかがうことができます。



地床炉



埋甕炉



流山市・柏市の「小金牧」（地理院地図より加筆）

2、江戸時代

江戸時代の流山には「小金牧」という江戸幕府が軍馬育成のため設置した放牧場が存在していました。小金牧は、現在の千葉市から野田市に及ぶ広大な放牧場です。

小金牧と農村の境界には二重の土手（野馬土手）が設置され、二重の土手の間には堀（野馬堀）が設けられていました。この堀は調査前には殆ど埋まった状態でしたが、当初は深さが約2mもあった事が分かりました。

そのほか江戸時代のシシ落とし（落とし穴）が発見されました。これは牧の中にいたイノシシなどの獣が、土手をこえて村の畑などを荒らされないために作られた穴かもしれません。当時の牧周辺にあった集落の様子をうかがえる遺構といえます。

【まとめ】

野々下元木戸遺跡では、江戸時代に設置された小金牧の野馬土手が調査前まで残存していましたが、その土手の下には縄文時代の集落跡が存在し、様々な生活の痕跡が発見されました。流山市野々下の土地利用の変遷を考える上で貴重な発見といえます。

令和6年6月29日 遺跡見学会資料

の の し た も と き ど い せ き

野々下元木戸遺跡

千葉県流山市野々下4丁目

主催：株式会社ノガミ

共催：流山市立博物館



調査区(A区) 遠景

【遺跡の概要】

野々下元木戸遺跡は、流山市の南東部に位置し、流山市立長崎小学校東側にある標高18～22mの台地上に所在します。これまでの調査で、縄文時代と古墳時代の集落跡や、江戸時代の野馬土手などが発見されています。

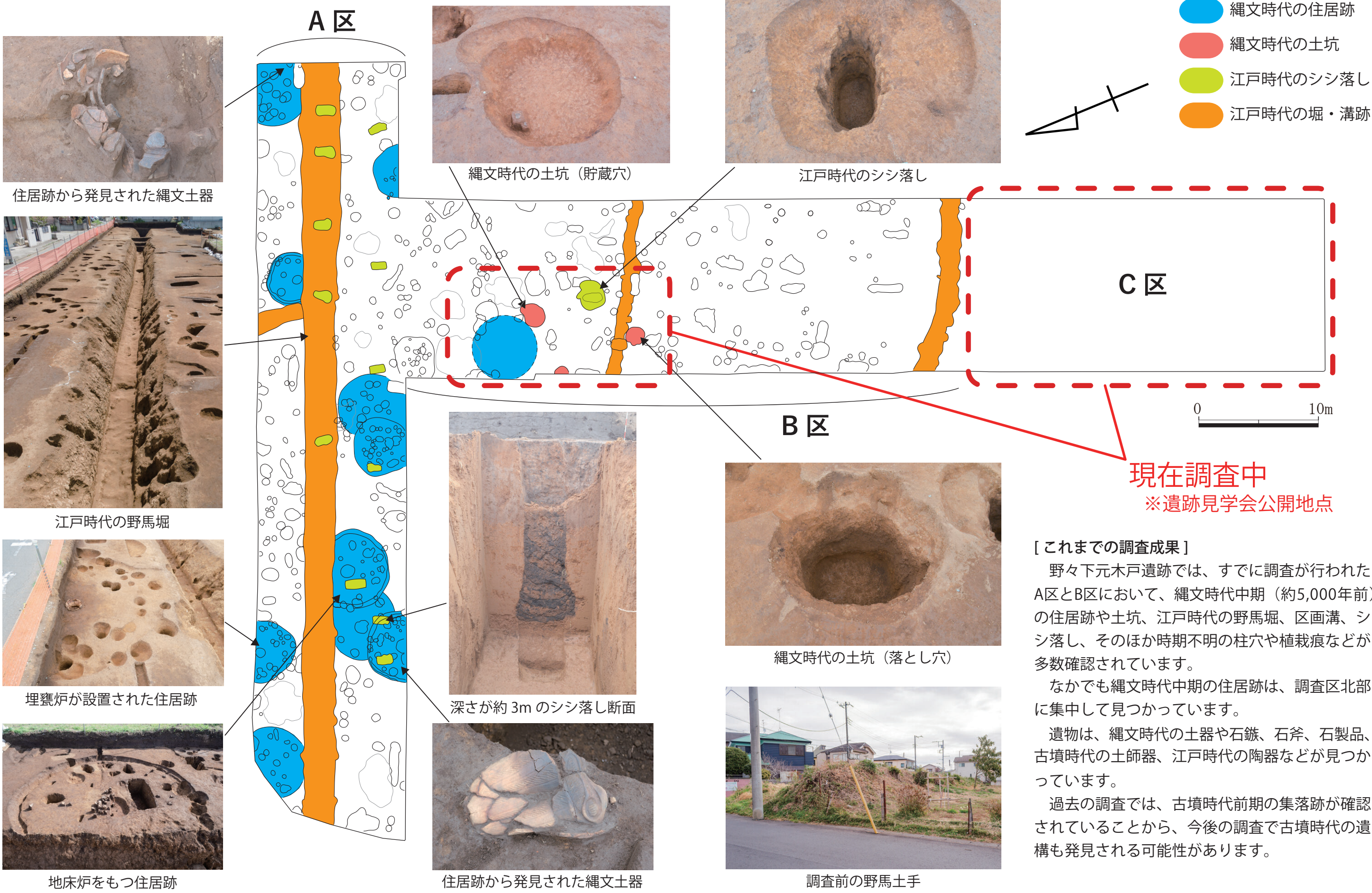
周辺には、同一の台地上に向下遺跡（縄文時代・古墳時代・近世）、野々下土手内遺跡（縄文時代）、野々下長田遺跡（縄文時代・古墳時代・近世）、台地の斜面を下った位置に長崎金乗院遺跡（縄文時代・古墳時代・中世・近世）などがあります。また、江戸時代に作られた放牧場である「小金牧」のうち上野牧に付属する野々下野馬土手や長崎1丁目野馬土手が一部残存しています。

野々下元木戸遺跡の本発掘調査は、平成18年以来度々実施され、今回が8度目の調査となっています。今回の調査は、宅地造成工事とともない、令和6年2月から2,086.5㎡（当初設計）の面積で調査を実施しています。



遺跡位置図（地理院地図より加筆）

野々下元木戸遺跡 8 次調査



〔これまでの調査成果〕

野々下元木戸遺跡では、すでに調査が行われた A 区と B 区において、縄文時代中期（約 5,000 年前）の住居跡や土坑、江戸時代の野馬堀、区画溝、シシ落とし、そのほか時期不明の柱穴や植栽痕などが多数確認されています。

なかでも縄文時代中期の住居跡は、調査区北部に集中して見つかっています。

遺物は、縄文時代の土器や石鏃、石斧、石製品、古墳時代の土師器、江戸時代の陶器などが見つかっています。

過去の調査では、古墳時代前期の集落跡が確認されていることから、今後の調査で古墳時代の遺構も発見される可能性があります。